

日本の山岳・高原リゾート地における疑似スイス風シャレー建築 と英国風・チロル風ハーフティンバー様式

河村 英和

Pseudo-Swiss Chalet Architecture and English or Tyrolean Half-Timbered Style
in Japanese Mountain Resorts

Ewa KAWAMURA

要旨：日本の山岳・高原リゾート地では、ハーフティンバー風の外装や山小屋（シャレー）風にデザインされた建物（ホテル、ペンション、別荘）が少なくない。戦前は、財閥などの有力者や登山家たちが欧風ハーフティンバーと山小屋建築に関心を寄せ始め、1930年代にはスイスの山小屋風を意識したホテルが日本各地に登場した。しかしスイスやチロルにあるシャレー建築の精巧な模倣ではなく、日本の山間の伝統的な木骨造の意匠との類似・親和性から独自に生み出された疑似・折衷的なものだった。戦後は高度経済成長期に伴うレジャーブームと、札幌・長野での冬季オリンピック開催によって起こったスキーブームにより、山岳地を中心にシャレー風の宿泊施設が増加してゆくが、やがてハーフティンバー建築も高原リゾートらしさを演出するものと誤って解釈されるようになり、スイスやチロル風の山間の民家とイギリスの田園地帯の木骨造（ハーフティンバー）のコテージ風建築やチューダー様式との混同と共存が顕著になってくる。しかしバブル期の1980-90年代に日本人が海外旅行を頻繁に行うようになり、本場スイスで本物のシャレーを見る機会が増え、現地のスイスシャレーにより忠実に似せようとした建物が、山岳・高原リゾート地に数多くできるようになった。

キーワード：山小屋、スイスシャレー、ハーフティンバー（木骨造）、ホテル、ペンション

1. はじめに—スイス国外におけるスイスシャレー建築の流行

日本の山岳・高原リゾート地では、英チューダー様式の木骨造「ハーフティンバー half-timber」(図1)と、スイスの山小屋「シャレー chalet」(図2)から着想を得た建物が多い。しかし本来の構造的な木骨造ではなく、あくまで外見を模したハーフティンバー風に過ぎず、付け柱によって木骨造のように見せかけた装飾的なもので、スイスの山小屋風にいたってはログハウスとシャレーと木骨造が混在したものであった。英チューダー様式風もスイスの山小屋風の建物も1920年代ぐらいから有力者の邸宅やホテル建築で散見されるようになり、戦後は、高度経済成長期とバブル期のスキーブームによって山岳・高原リゾート地を中心に、スイスのシャレー風のホテルやペンションが建てられるようになり、バブル期から1990年代までさらに興隆していった。本論は、日本における疑似的なスイス・チロル風シャレー建築の偏愛現象を、その代表的な事例を時系列とともに追って傾向と変遷を明らかにすると同時に、なぜ山岳・高原リゾート地に英国風ハーフティンバー意匠の建物も山小屋風と誤って解釈され共存してきたかという問いにも答える試みとする。

スイス国外でスイスシャレーが建設されるという現象は、まず18世紀末にイギリスではじまり⁽¹⁾、19世紀にはヨーロッパ大陸へ、20世紀初頭にはアメリカやカナダへと波及した。初期の例は、ピクチャレスク picturesque の美意識に敏感な英国人貴族や富裕層の間で培われ、彼らが所有する広大な庭園の一隅に、「スイス・コテージ Swiss cottage」(当時はまだ外来語「シャレー」が普及しておらず「コテージ」と呼んでいるが、山小屋・シャレーのことを

指している) を建てるのが流行した。つまり当初は英国貴族の庭園内に、茅葺きの田舎家を置くことによって風情あるピクチャレスクな景観にするために建設されたスイス・コテージではあったが、スイスの山岳の美しさを早くから発見し、スイスを旅行してアルプスを熱心に登攀しはじめたのも英国人であった(河村, 2013)。19世紀になって人気定着した旅行先スイスの雰囲気、英国人に限らず他の外国人が自国でも堪能しようとする意図から、スイス風の山小屋を建てるのが欧州各地で起こりはじめ、とりわけ別荘建築、湖畔のボートハウス、海水浴場近くの小屋、公園の飲食店のような小規模建築でスイスの山小屋風にすることが流行した(Kawamura, 2018, 324)。ヨーロッパ各地で行われたスイスシャレーの模倣建築は、山岳地に限定されておらず、ときには内陸の温泉町や別荘地、海浜地にまでも散見される。その一方で、アメリカやカナダ、日本では山岳地帯を中心にスイス風の建物を建てる傾向がある。



図1：英チューダー様式のハーフトィンバー建築の一例（トーマス・ハント『チューダー建築作例集』1830年の図版27番より）



図2：典型的なスイスシャレーの一例
(ペーター・フレデリク・ロビンソン『素朴な建築一飾りとしてのコテージ作例集』1828年版の図版32番より)

本論のテーマとする日本での事例が増えるのは戦後以降で、山岳・高原リゾート地のホテル・ペンション、別荘建築に顕著であるが、それにはどのような傾向があるのだろうか。なお日本の場合、純粋なシャレー建築だけでなく、ハーフティンバー意匠の建物をスイス風あるいは山小屋的なものと混同して考える奇妙な慣習が出来上がってしまっているが、それは一体なぜなのだろうか。

2. 戦前の日本にできたスイスの山小屋風の建物

(1) 有力者・知識人の私邸にみるスイス風

日本人が本場で本物のスイス建築を目にした初期の例に、1873年に行われた岩倉具視率いる学生・政治家ら総勢107名による米欧回覧中のスイス滞在がある。徳川家がそれをきっかけに木造のスイス建築（シャレー様式）に関心を示したのか、スイスのクーア Chur を拠点とするシャレー専門の建設会社クオーニ Kuoni が1900年頃に出版したシャレー建築図集の中に、徳川家の別邸の完成予想図が掲載されているが、それは質素な山小屋的なシャレーではなく、当時スイスで流行していた郷土様式「ハイマートシュティール Heimatstil」のシャレー様式建築で、木製装飾が多い華やかなものである（Sauter & Seger, 2014, 168）（図3）。しかし、その建設予定地も実現の有無も不明である。

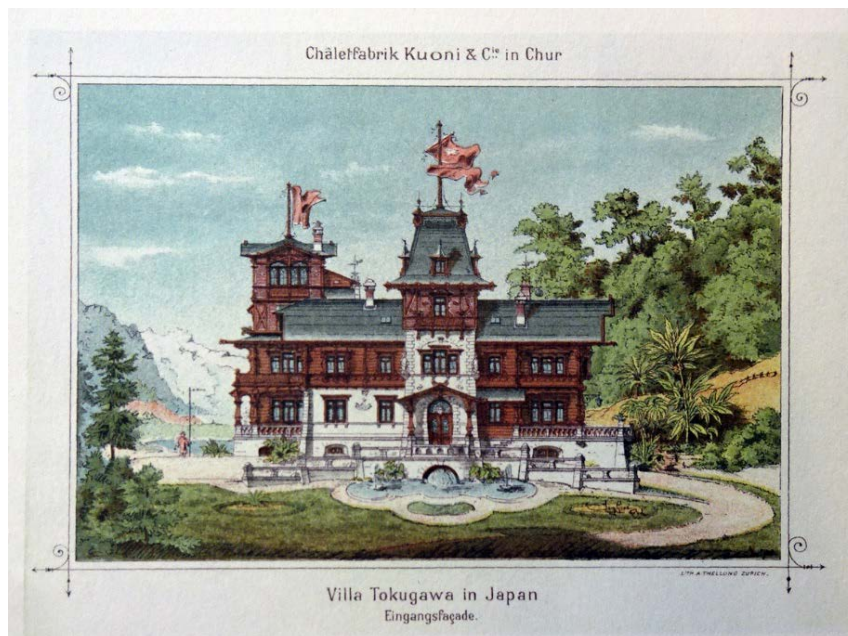


図3：シャレー専門の建設会社クオーニが1900年頃に提案した、ハイマートシュティールのシャレー様式でデザインされた徳川家別邸の完成予想図（出典：Sauter & Seger, 2014, 168）

現存する日本最古のスイス風建築は、おそらく東京・台東区の旧・岩崎邸の庭園内にあるビリヤードルームの建物だろう。これは1896年、英国人建築家ジョサイア・コンダー Josiah Conder（1852-1920）がデザインしたスイス・コテージ風の離れで、先に触れたよう、英国では有力者の広大な庭の一隅にこのような田舎風の小規模建築やスイス・コテージを建てる文化があるゆえ、英国人らしい発想に基づいたものである。当時は日本人建築家ではまだ思いつくすべもなかったが、1908年、西洋の住宅建築に造詣深い建築家の西村伊作（1884-1963）が、欧米旅行のさいにスイスを訪れ⁽²⁾、のち1914年、生まれ故郷である新宮の自邸を山小屋風に建てている。西村は自伝『我に益あり』のなかで、この自邸を「西洋ふうであるけれども、屋根は桑原の山の村の民家の屋根の形を取って作ってある」（西村、1960, 226）と説明しているが⁽³⁾、スイスシャレーを念頭においていた可能性も捨てきれない。というのも西村伊作は、後年の著作『楽しき住家』（1919年）のなかで、スイスの山小屋をモデルにした家を日本の山岳地帯で建てることを勧めており、次のように書いているのだ。

「木造で我々が試みてみたいのはスミス風の家です。瑞西の田舎家は特殊な洋式をもって居り山國の建物として、自然にできた良い感じのするものです。(中略) 自然に出来たものは飽き来ず、見て居るに従って同情の念が起こります。／スミスコテージの特徴は屋根が大きく、簡単にただ一つの棟で家全体を藪いて、軒が多く出ており、破風にも一種の形式があり、壁は丸木小屋式になって居るのです。どこにも不要の装飾がなく、しかも家全体が調和した一つの置物になって居るので、近頃は間取りの工合や、生活の複雑なために、スミス風の住宅もなかなか大きなものが出来、窓や手すりや階段の縁側などの組み合わせが中々複雑になって、現代人の賑やかな心にも合う様に思われます。森の中とか、山國や山林の多い地方などには此式の家を建てたら宜しいと思います。／山國の住宅には丸太小屋や、ログキャビンが何の國でも自然に出来るものと見へますスミスコテージはログキャビンから出たものですが、北欧の各國の山間の家、文明の風邪に吹き倒されずに居る家は今でもログキャビンが多いらしいのです。近頃の新しい建築にも、此の風雅な丸太小屋を應用した設計がちよいちよいあるらしく、雑誌などに時々出て居ます」(西村, 1919, 125-127)。

さらに西村伊作は著書『生活を芸術として』(1922年)のなかで、「^{スイス}瑞西の山莊」や「^{イギリス}英吉利のコテージ」などの田舎の素朴な民家建築については、「どの国の民家でも眞に民家である民家の様式、といふよりは、民家の意義を失わずして有つて居る家ならば、必ず日本の風景にも人間にも不調和でないと信じます」(西村, 1922, 143)と書いている。つまりスイス・コテージだけでなく、英国のコテージも日本の環境・住宅に合わせやすいことを述べており、英国のコテージは半木骨(ハーフティンバー)造なので、スイスの山小屋風とともに英国風ハーフティンバーが日本の住宅に混在する原因に繋がる見解にもなっている⁽⁴⁾。

スイスの山小屋を参考にして日本の家を建てようとする考え方は、建築家の保岡勝也(1877-1942)にも見られる。1908~9年の欧米旅行中、スイスに寄った保岡は、モンブランやユングフラウを登頂して山小屋のスケッチをしており(保岡, 1934, 185-186)、「スミスの山莊」と題するエッセーを書き、スイスの山小屋建築(スイス・コテージ)を絶賛している。保岡によれば、スイスの山小屋は日本人の好みによく合致しているとはいえ、日本の山小屋でそっくり真似する必要はないが、参考にするには良いと以下のように述べているのだ。

「(スイスの山莊は)他の歐米諸國の模倣を許さぬ雅致あるものが、古來數多建てられてゐる。／濫味という謂ふ事は、世界に於て只獨り大和民族丈けが、理解い得る大なる誇りであるが、強ひて歐米の沒趣味な建築中に、此要素を含むものを求めれば、『スミスコテージ』を擧げる外はないのである。(中略)本邦の山小屋には、之を鵜呑みにして模倣するには及ばないが、山莊としてスミスのもの、研究は、大に吾人を開發せしむる點があると思ふ」(保岡, 1934, 184)。

登山を愛した実業家の加賀正太郎(1888-1954)は、1910年、アルプスの山々に登りユングフラウの登頂を果たしたさい、スイス山岳会が管理するベルグリの山小屋 Berglihütte に泊まり、その外内装の詳細の記述・平面図や備品のスケッチを残している(加賀, 1911; 1961, 11-12)⁽⁵⁾。そんな加賀が、1934年から移り住んだ京都の大山崎山莊(現・アサヒビール大山崎山莊美術館)の敷地内に(中村, 1959, 4-5)、チロルかスイスカ判別しかねるシャレー風の車庫(現・休憩所)(図4)と山小屋(ログキャビン)のようなデザインの離れの茶室を建てたのは偶然ではない(図5)。大山崎山莊は1912年から着手され、増改築を経て1932年頃に完成した母屋は、英チューダー様式のハーフティンバー調のRC造である。つまり英国風の木骨造(ハーフティンバー)の母屋とアルプスの山岳建築風の離れの建物の共存は、登山家だった加賀の趣味と、英国滞在経験で培った英国文化の影響の両方によるものだろう。つまり1世紀以上遅れて、英国の富裕層の間で流行した趣味のスイス・コテージ造りが、日本人によって開始されたのだ。

このような現象は同時代の日本各地の有力者の屋敷でもみられる。たとえば1922年、海運で材を成した越前の豪商(のち日本火災海上保険の会長)の11代目右近権左衛門(1889-1966)は、神戸港へのアクセスが便利な芦屋に建てた本宅で、離れの収蔵庫棟の2階を丸太のログキャビン風で、1階はハーフティンバーでデザインさせている(図6)。さらに同11代目右近権左衛門は1935年、南越前町の邸宅(現・北前船主の館・右近家)でも、離れとなる高台のRC造の洋館を建設するさい、上階部分の外装に丸太を用いたスイスシャレー風のデザインを取り入れている(図7)⁽⁶⁾。

また、百貨店「松坂屋」の創業者である伊藤祐民^{すけたみ}(1878-1940)は、1918年から名古屋の覚王山に造営していた「揚



図4：大山崎山荘にあるシャレー風の車庫（現・休憩室）、京都府乙訓郡大山崎町（2017年11月、筆者撮影）



図5：大山崎山荘にあるスイスのログキャビン風の茶室、京都府乙訓郡大山崎町（2017年11月、筆者撮影）

輝荘」に定住するのだが⁽⁷⁾、1935年にスイスの山小屋から着想した上高地帝国ホテルをモデルにした木造住宅「聴松閣」を、小林三造（生没年不明）の設計で増築させている。

(2) 登山家たちが抱いたスイスの山小屋への憧れ

スイスの山小屋風の外観の茶室を造った加賀正太郎が登山家でもあったよう、日本におけるスイス風山小屋建築への憧れは、登山家たちの間で顕著だった。1929年に登山家の藤木九三^{くせう}（1887-1970）が書いた「アルプスの山小屋」と題する自身の体験録では、イタリアやフランスの山小屋と比べ、日本の山小屋について「あの無趣味な建築といたらどうでしょう」と設備の貧弱さだけでなく、そのデザインも嘆き、スイスの山小屋の清潔さや設備の良さなど格段に優れた点を挙げている（藤木, 1961, 238）。



図6：スイスの山小屋風にデザインされた旧・右近家の收藏庫棟、兵庫県芦屋市（2017年12月、筆者撮影）



図7：スイスシャレーのような外観の旧・右近家住宅西洋館、福井県南条郡南越前町（2020年9月、筆者撮影）

登山家の松方三郎（1899-1973）は、「スイスの山小屋」というエッセーの冒頭で「将来自分で自分の家を建てるようなことがあったら、アルプスの山小屋をそのまま建てて見たらどんなものだろうと、考えたことは一度や二度ではない」と述べつつ、スイスの自然景観と日本のは気候も違うので、「アルプスの山小屋を日本で建てて見ようなどと考えても、あまり意味がない」と悟っでもいるが、「（アルプスの）山小屋が如何にも美しい建築物となっているという事実は、移してもつて日本の場合にも大いに参考になると思う」とも書いている（松方、1956, 16）。

そんな時代、北海道にスイス人の手によるスイス風の山小屋が3件登場した。まず1926年、札幌近郊の手稲山に、木造2階建てのシャレー風の「パラダイス・ヒュッテ Paradise Hütte」が完成した⁽⁸⁾。北海道大学で教鞭を取っていた二人のスイス人、建築家マックス・ヒンダー Max Hinder（1887-1963）とドイツ語教師アーノルド・グブラー Arnold Gubler（1897-1983）の設計による、日本初の「純瑞西式のスキーヒュッテ」（向井、1933, 168）である⁽⁹⁾。さらにヒンダーとグブラーは、翌1927年、札幌の定山溪に、国名スイスのラテン語 Helvetia を冠して命名した山小屋「ヘ

ルヴェティア・ヒュッテ Helvetia Hütte」を、スイス・チューリヒに留学経験のある医学部教授の山崎春雄（1886-1961）の協力も得て完成させた（大学総合研究シリーズ企画編集委員会, 1980, 293）⁽⁴⁰⁾。こちらは高床式の平屋で屋根は榎葺き、玄関扉と兩戸はスイスの伝統建築にあるような白と赤の放射状模様で塗装されている。

さらなる山崎の功績は、スイス人建築家グスタフ・クルック Gustav Kruck（1875-1934）によるスイス山岳会の山小屋紹介の著作を翻訳し、1930～31年に雑誌『山と雪』に連載して紹介したことである⁽⁴¹⁾。その影響もあったのか、日本建築学会は1933年11月、国立公園（高地、森林、草原、湖畔などに位置する）に相応しい山小屋建築の計画案を募集している。構造は木造に限定せず「自由」とされ、翌年出版された『国立公園ニ建ツ山小屋 建築設計図案集』（1934年）には、このコンペに入選した図面が紹介された。1等は、後年ゴルフコース設計の専門家となった真野貞吉（1903-1979）の案で、立地は白馬山を想定し、信州の民家を参考にしつつ「スイス」風に加味したと真野自身が説明している（建築学会, 1934, 6）。2等1席（立地は十和田湖畔を想定）と2等3席（黒部川上流の森林地帯を立地に想定）は相沢珠壺（生没年不明）、2等2席（白馬岳を立地に想定）は村田政真（1906-1987）の案で、こちらはハーフティンバー構造（木骨大壁式）で「屋根は日本小屋組み」としていた（前掲書, 15）。最もスイスシャレーに近いデザインのもの、佳作に入選した出隆雄の案（立地は日本アルプスの森林を想定）だった（前掲書, 21-24）。

(3) スイスの山小屋から着想された外観のホテル

1930年代以降、スイスの山小屋風と称するホテルが日本各地の山岳・高原リゾート地に建設されてくるが、それらはいずれも本場のスイスシャレーとは似ても似つかないデザインで、日本各地の山間にある半木骨の伝統民家、国籍不明のログハウス、欧風ハーフティンバーが混在していることが多い。とくにハーフティンバーの意匠は山岳地のホテル建築で顕著で、じっさい19世紀後半以降にドイツ語圏で流行ったハイマートシュティールにも、スイスやチロルや中欧の山間部の建物でも、ハーフティンバー（独：Fachwerkhaus）はよく用いられるので（図8）、日本でも山岳建築をハーフティンバーで表現してしまうのは必ずしも見当違いではないだろう。しかしこれらは英チューダー様式のハーフティンバーとは性格を異にするものであるが、日本ではハーフティンバー装飾があるだけで山小屋風と称することが多いのだ。やがてイギリスを除くヨーロッパ大陸の山岳地や森林地帯にあるハーフティンバーと、英国チューダー様式のハーフティンバーが混同して誤解され、バブル期ともなると山岳・高原リゾート地に、高山地域とは無関係なはずの英チューダー様式風のハーフティンバー意匠のペンションやホテルが乱立するようになった。おそ



図8：スイスのハーフティンバー建築（独：Fachwerkhaus）の一例として挙げられたエフレティコン Effretikon 近くにあるマンネンベルク Mannenberg の水車小屋（エルンスト・グラートパッハ『ドイツの木造建築と比較してみるスイス各州の木造様式の違い』1882年より、チューリヒ工科大学図書館蔵）

らくこの原因はすでに戦前から、日本人のハーフティンバーの受容が日本の山間の民家の木骨造との親和性と相まって、山岳ホテルのイメージとも強く結びついていたことに起因するのだろう。

日本におけるハーフティンバーでデザインされたホテル建築の初期の事例には、先に触れた英国人建築家コンダーが設計した鎌倉の「鎌倉海浜ホテル」(1906年) (図9) や、下田菊太郎 (1866-1931) 設計の神戸の「トアホテル」(1908年; 1950年焼失) (図10)、沼津の千本浜にあった「仙松閣ホテル」(1920年以前) などが挙げられる⁽¹²⁾。神戸のトアホテルは、丘陵地の北野町にあるので、ハーフティンバー建築の山岳イメージと結びつきやすく、じっさい1929年に建った、古塚正治 (1892- 1976) 設計の神戸の「六甲山ホテル (旧・宝塚ホテル別館)」もハーフティンバー様式で、「スイスのコテージを思わせる」と当時のパンフレットに記述されている (図11)。しかし鎌倉も沼津も海浜町であるにもかかわらず、その町を代表するホテルに欧風ハーフティンバー意匠が採用されたのは一体なぜだろうか。なお当時の鎌倉では、有力者たちの洋館別荘でもハーフティンバー建築のものが少なくない。それはフランスの海浜町アルカション Arcachon で19世紀末から20世紀初頭にかけて、山小屋・シャレー風の避寒用別荘が多く建設され—それはバスク地方の木骨造の伝統民家「メゾン・バスク Maison basque」の影響があるのだが (Esteban, 2008) —、海に面した町でもハーフティンバーを使った山小屋風の建物が多い事実を思い起こさせる。仏ノルマン

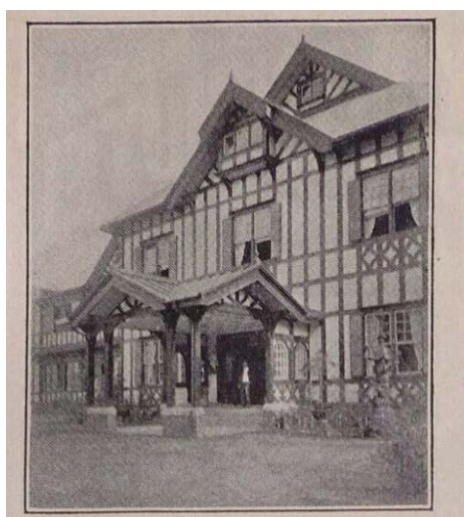


図9 (左) : ハーフティンバー意匠の鎌倉海浜ホテル (現存せず) (1914年の英文広告用写真より)

図10 (右) : ハーフティンバー意匠の神戸のトアホテル (現存せず) (20世紀初頭の観光絵葉書より)



図11 : 旧・六甲山ホテル (現・六甲山サイレンスリゾート) (2021年4月、筆者撮影)

ディーの海浜リゾート地、エトルタ Étretat やドーヴィル Deauville などでも、木骨造の伝統建築から着想したハーフティンバー意匠の近代ホテル群がベル・エポック期に続々と建設されたことから (Gandin, 2009)、ヨーロッパのハーフティンバー建築は森林地帯や山岳地域に限定されるものではなく、海浜リゾートとの相性も悪くなかった。

日本建築学会は 1933 年秋、先に触れた国立公園内の山小屋のコンペだけでなく「国立公園に建つホテル」というテーマのコンペも行っている。立地は自由で、規模は 50 名人収容という条件下、72 件の応募があった。審査員は、今井兼次 (1895-1987)、大熊喜邦 (1877-1952)、岸田日出刀 (1899-1966)、山下寿郎 (1888-1983)、渡辺仁 (1887-1973) といった名立たる建築家たちである。金賞を獲得した建築家の辻岡通 (1886-1955) のデザインは、木材を多用した山小屋風で、審査員の岸田日出刀は、スイスのユングフラウヨッホ山麓で泊まった山岳ホテルを思い起こさせると評している (岸田, 1934, 14)。

スイスシャレーあるいはスイスの山小屋の意匠を意識したと当時の記録が残る山岳地帯のホテル建設は 1930 年代に集中している⁽¹³⁾。上高地ホテル (1933 年)⁽¹⁴⁾、雲仙観光ホテル (1935 年)⁽¹⁵⁾、日本初のスキー客向けとなる志賀高原温泉ホテル (1937 年)⁽¹⁶⁾、赤倉観光ホテル (1937 年、塔屋部分がシャレー風)⁽¹⁷⁾、阿蘇観光ホテル (1939 年)⁽¹⁸⁾ (砂本, 2008, 135-139; 157; 168; 171; 210; 238-239; 264-278) であるが、スイス風はあくまでイメージであって、実態は本場スイスのシャレー様式とはかなり乖離した意匠だった。オレンジ瓦葺の屋根で白漆喰壁のスパニッシュ様式も混在しているが、金沢の湯桶温泉の白雲楼ホテル (1937 年) も⁽¹⁹⁾、その外観の一部分の意匠については「スイスシャレー風」と当時のパンフレットに明記されていて、前年の 1936 年に同じ大林組によって設計・施工された山中温泉のホテル「河鹿荘」の外観もそれによく似ている (金沢市史編さん委員会, 1998, 224; 262) (図 12)。

じつはスイスの山小屋風と英チューダー様式建築と同時に、戦前の日本でむしろそれ以上に流行していた海外の建築様式はスペイン風—とはいえカリフォルニア経由のスパニッシュ・コロニアル様式だが—であり、西村伊作も自身の著書のなかでスパニッシュ様式の住宅を度々紹介していた (西村, 1919, 132-133; 1923, 46, 49-50)。先にふれた南越前の旧・右近家住宅西洋館も、白雲楼も河鹿荘もがスイス風とスペイン風が混在したデザインを呈し、スイス風の六甲山ホテルの本館である宝塚ホテル (1926 年築) にスペイン瓦が使用されスペイン風パティオを有していたことも、そのような理由からである。

また、軽井沢の万平ホテルの新館 (現・アルプス館) (1936 年) の久米権九郎 (1895-1965) によるデザインはスイスの山小屋をモデルにしたという説もあり (図 13)、じっさい当時のバーの内装のための建築立面画 (万平ホテル収蔵) では欧風山小屋風のハーフティンバーとなっているが、万平ホテルの外装は明らかに信州の木骨造の伝統民家に似ていて、佐久地方の養蚕農家から着想したものとされている (桐山・吉村, 2012, 71)。

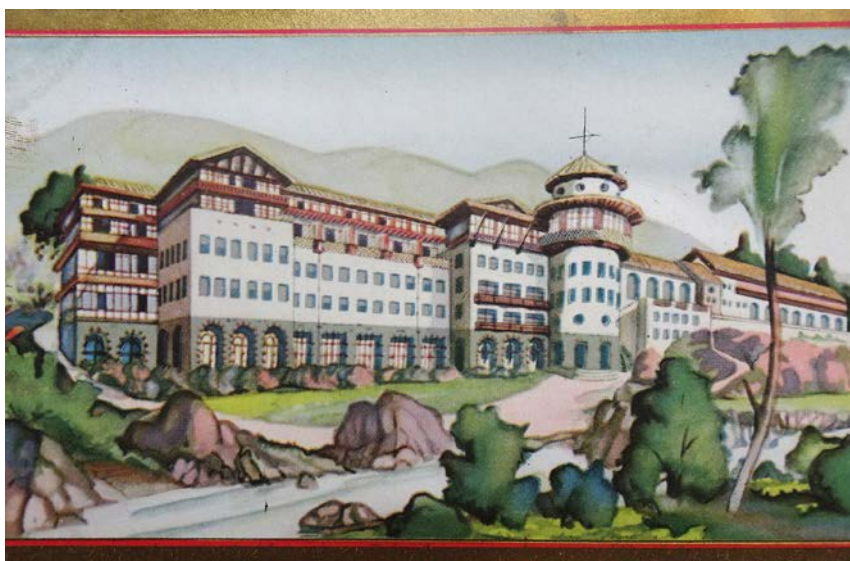


図 12：当時の絵葉書にみる山中温泉のホテル「河鹿荘」のスイスシャレー風意匠が加味された外観 (筆者蔵)



図 13：軽井沢の万平ホテルのアルプス館（2020年7月、筆者撮影）

やはり日本で広がったスイスの山小屋風とハーフティンバー意匠の混在と混乱は、信州に限らず日本各地の山間の古民家に木骨造が散見されるため、そのイメージと重なってしまうことに起因しているのだろう。じっさい西村伊作は、1921年に軽井沢近郊、星の温泉にある友人の山荘の設計をしたさい、木骨造の「板葺きに石載せの屋根の信州の民家風」（西村、1923、2）で提案した。さらに伊作は『生活を芸術として』（1922年）のなかで、日本の古民家には、英国の半木骨造のコテージやスイスシャレーにも似た点があることを次のように指摘している。

「千葉の一部の家は實に巧に、面白く出来た草葺の屋根、柱を見せた塗り壁で恰度英國のコテージの感じがあります。信州から中仙道にかけた山腹の村々に建てられた家は勾配の割合ぬるい屋根の軒端が深く出て、石を載せて屋根板を押へたもの、そして二階が少し外へ出張つて居るところなど瑞西の山荘に似たものです」（西村、1922、155）。

さらに1929年にスイス旅行を経験した地理学者の小牧實繁^{さねしげ}（1898-1990）も、「アルプスやピレネーに遊んで其處の風景、殊にその民家を中心とした文化風景に魅せられた人達は必ずやその類似のものを我々の故國にも求めようとするであろう」（小牧、1936、26）と述べ、日本でもスイスシャレー建築の模倣を望みつつも、岐阜や長野の木骨造の民家が山岳景観とよく調和する素晴らしさについても強調しているのだ。

3. 戦後の日本にできたスイスの山小屋風の建物

(1) 1950-60年代の山小屋風建築

戦後すぐには、スイスの山小屋風と紹介される国内の建築事例に際立ったものは見つからない。GHQの占領下、アメリカ文化の影響を強く受けるようになり、住宅建築もアメリカの状況が好んで紹介されたが、須藤真金（生没年不明）の著作『あめりか住宅史話』（1950年）では、カリフォルニアに建った「スイス山小屋風のバンガロー」の事例として、モリソン・ハント Myron Hunt（1868-1952）& エルマー・グレイ Elmer Grey（1871-1963）が設計したスイスシャレー風の「ロバートソン邸 Villa Robertson」（1906年）の平面図と外観写真が掲載された（須藤、1950、48-49）。

なお1951年には、ドイツ留学経験のある白井晟一（1905-1983）の設計によって²⁰、秋田の雪国の山間にできた秋ノ宮村の村役場（施工・沼倉組）が、「村の民家にモチーフを得」（白井、1952、36）た「農村建築」と説明されていたが（白井晟一研究所、1955、18）、これはスイスカチロルのシャレーとも思わせる外観でもあるので²¹、これは戦後

日本での最も早い欧風山小屋風建築の事例の一つと言ってもよいだろう²²⁾。

1960年前後の建築雑誌『新建築』では山小屋風建築が幾度か取り上げられている。1958年2月号では、東武興業株式会社の2つの宿泊施設一栃木・日光国立公園の光徳地帯にある「光徳ロッジ」(竹中工務店)と群馬・赤城山の「赤城ロッジ」(清水建設)一が紹介され、同号には、蔵王のドッコ沼の山小屋を設計した樋口清(1918-2018)による論考「山小屋のこと」も掲載されたが、海外の事例は伝統的なシャレーではなく近年のイタリアの斬新な山岳建築の紹介だった。なお樋口清は、野沢温泉では「ハーフティンバーありロマネスクありで、変わった形」の建物でスキー客の気を引くようにしているとも証言している(樋口, 1958, 46-47)、山岳地には欧風ハーフティンバー建築が当ても珍しくなかったことが想像できる。

『新建築』1960年5月号では山小屋風の保養所や別荘の事例が数多く掲載されたが、いずれも和の木骨造の古民家の意匠要素が強いものばかりだった²³⁾。同年12月号では、清家清(1918-2005)の設計による新潟・赤倉(妙高山の山腹)の山小屋が紹介されたが、切妻屋根がアルプス山麓のものよりも急勾配なので北欧風になっている。翌1961年の『新建築』8~9月号では、合計8件の山荘(山岳地の別荘建築)が紹介されたが、ここでもスイス風のものはまだない²⁴⁾。しかし8月号で紹介された軽井沢の別荘を設計した曾原国蔵(生没年不明)は²⁵⁾、同号掲載の「山の建築」という論考のなかで、「過去の傑出した建築と同様に、山間の民家、とくに海拔1000mから2000mの間に散存するアルプスの建築は、わたくしたちの心を深くとらえて離さない」(曾原, 1961, 68)と述べ、スイスの民家(サンゴツタルド峠、ヴァレーの谷、エンガディン、スプルガの谷間)や、仏サヴォア地方のシャレー様式の別荘建築を参考事例として紹介している。

そして東京オリンピック開催年でもある1964年には、東京四谷の左門町に「スイスシャレー」という屋号のスイス料理店が開業する。地下にシャレーを再現した内装で、「山小屋につくられた店内は、白い漆喰の天井と木の壁とレンガをふんだんに使い、暖炉を置いたり、テーブルの上にはスイスの国旗」が飾られ、ヨーデルも流れており(実業往来社, 1972, 123)²⁶⁾、日本国内でのスイスシャレーの浸透は着々と進んでいた。

(2) ホテル建築にみる山小屋風、そしてスイスシャレー風

戦後のホテル建築にも山小屋風あるいはスイスシャレー風を意識したものが幾つか登場した。『新建築』1951年7月号では、村野藤吾(1891-1984)設計の志摩観光ホテル(志摩国立公園・賢島)が紹介されるが、このRC造と木造混合の建物は、地上階の石積み壁と切妻屋根と煙突のあるシルエットによって、巨大な山小屋建築のようにも見えるデザインであるが、内装は丸太の梁を見せた古民家調のハーフティンバーで、むしろ和の趣きが強い。『新建築』1953年8月号で紹介された、白井晟一設計の秋田県稲住温泉のホテルの会議室棟「浮雲」は²⁷⁾、スイスカチロルの山小屋のようなシャレー風の外観と内装であるが、同時に和風意匠も混在していた。それは、都会から来る湯治客が期待する現地の郷土建築の雰囲気も残しつつ、地元客が非日常を楽しめるよう欧風デザインも取り入れたためであったという(白井晟一建築研究所, 1953, 24)。

建築家の村田政真が設計した1958年創業の霧島高原ホテル(宮崎県えびの高原)は²⁸⁾、霧島国立公園の自然環境を配慮し、「韓国岳の稜線に合わせて、建物全体を大きな切妻屋根として扱った」山小屋風のフォルムである。「霧島産の丸太材によって構成し、石積、敷石等、すべて現地のものを使用」(村田, 1960, 11)していて、意匠にスイスや欧風を感じさせる要素は希薄だが、フランスの建築のように細部のデザインで様々な芸術家を起用したという点は当時としては新しかった(村田政真建築設計事務所, 1959, 26)。

1956年、ヒマラヤ山脈マナスルが日本隊によって初登攀され、同年スキー選手の猪谷千春が冬季オリンピックで銀メダルを取ったことは、山岳・スキーリゾート開発にも影響を及ぼし、ついにヨーロッパのスキーリゾートにもありそうな本格的なシャレー風建築のホテルを登場させた。それは1959年開業の白馬東急ホテル(長野県白馬村)で(図14)、木造ではなくRC造であるが、ル・コルビュジェに師事しフランス滞在経験のある建築家、坂倉準三(1901-1969)の設計(藤木, 1960, 27)で、当時は白馬村のランドマークとなった²⁹⁾。

スキーリゾートの発展に伴うシャレー風ホテルの増加は、1972年に札幌で開催された冬季オリンピックが引き金となっている。たとえば社長小川栄一(1900-1978)率いる藤田観光は、長野県の企業局が進める斑尾高原保健休養



図 14：1959 年開業当時の白馬東急ホテル（現存せず）、長野県白馬村（『建築文化』1960 年 3 月号より）

地開発事業（飯山、斑尾、野尻湖を結ぶ高原ルートの建設）の一環として、RC 造のシャレーのような外観をもつ斑尾高原ホテルを 1972 年末に開業させている（林, 1973, 34）³⁰。鉄道では迂回する路線しかないが、車道では斑尾高原から直接行きやすい黒姫高原の黒姫ライジングサンホテルも同じく 1972 年の創業で、RC 造のモダンなシャレー風建築だ³¹。

本格的なスイスシャレー風ホテルの誕生には、1974 年放映の TV アニメ『アルプスの少女ハイジ』の影響も見逃せない。「ハイジ」のアニメ化自体も、すでに日本人の意識のなかに山小屋のある牧歌的なスイスへの憧憬があったことに起因しているが（河村, 2021b, 64）、アニメ化による視覚化、すなわち現地ロケで精巧に表現されたスイスの山小屋の映像が日本人の目に焼き付けられ、シャレー建築を再現する意欲がさらに掻き立てられたのだろう。1975 年蓼科高原に、「ホテルハイジ」が、その屋号に合わせてスイスシャレーを思わせる建物（設計：小笠一級建築士事務所）で誕生した³²。シャレー風の母屋の横に、欧風ハーフティンバー意匠の棟も建ったのは、ハーフティンバーと山小屋風建築が調和すると解釈されるからに他ならない（図 15）。このホテルハイジは、元皇族の東伏見^{あきよし}留^{あきよし}氏が皇族所有の土地に建てた高級ホテルで、「チロル地方の山荘を模し、木をふんだんに」使用したという（早川, 1975, 38）。志賀高原をはじめとする多くのスキー客向けホテルが、シャレー風の外観を呈していても客室は畳の和室ばかりだったが、ここは洋室のみという当時としては画期的な試みだった³³。

一方、アニメ「ハイジ」と同年の 1974 年に放映された TV ドラマ『高原へいらっしゃい』は、ハーフティンバーの洋館が山岳・高原リゾートに相応しいという誤った認識を広げることに貢献した。このドラマの舞台は、八ヶ岳高原のシンボリック存在の「ホテル八ヶ岳高原ヒュッテ」で、もともとは 1934 年に徳川義親（1886-1976）の邸宅として東京・目白に、渡辺仁（1887-1973）の設計で建った英チューダー様式のハーフティンバー建築であるが（図 16：左）、1968 年に八ヶ岳へ移築され、ホテルに転用されていた³⁴。建物内部には、階段の手すりなど随所に熊の木彫りが施されているが（図 16：右）、これは徳川義親が、1921 年にスイス旅行をしたさい気に入った観光土産の熊の木彫りを、自身が開拓していた北海道八雲村の農閑期の仕事としてアイヌに伝授した証でもある（大石, 1994；大谷, 2019）。このスイス風の木彫りが施された内装のある英チューダー様式建築である徳川義親の邸宅が八ヶ岳高原に移築されたことと、スイスの伝統工芸の片鱗がハーフティンバー建築に溶け込んだことは、英チューダー様式や国籍を特定しないハーフティンバーの建物もが山岳リゾートに調和するという誤解を生んだ。こうして八ヶ岳のみならず、ほど近い清里高原においても、英国風ハーフティンバー調のペンションや別荘を増加させることに一役買った。1979 年、清里にハーフティンバー調のホテル「ハットウォールデン」が開業し（浦, 1989, 31）³⁵、それと同時にできた複合施設「萌木の村」の建物のほとんどがハーフティンバー意匠なのは、明らかに八ヶ岳高原ヒュッテの影響だ。さらに 1981 年



図 15：シャレー風の母屋にハーフティンバーの棟も隣接するホテルハイジ、長野県茅野市蓼科高原（2020年6月、筆者撮影）



図 16：ハヶ岳高原ヒュッテ（旧・尾張徳川家本邸主屋）の外観（左）と内部の階段手すりに施された熊の木彫り彫刻群（右）、長野県南佐久郡南牧村（2020年8月、筆者撮影）

開業の蓼科東急ホテルも、山小屋風ハーフティンバー（一部木造RC造）で³⁶⁾、同1981年上越国際スキー場に、極めて大規模なハーフティンバー意匠の外観を呈したホテル「グリーンプラザ上越」が開業し、同社によって似たような外観の2件のホテル「グリーンプラザ軽井沢」（1984年）と「グリーンプラザ白馬」（1989年）（図17）も建設された。これらはロンドンのリバティ百貨店のネオ・チューダー建築を巨大化したような迫力ある特異な建物で、チューダー様式風のハーフティンバーが、ニッポンの高原リゾートの雰囲気盛り立てる一手段であることが、暗黙の了解と化したことを象徴している。

バブル期になると、海外旅行が盛んになりじっさいにスイスを訪れる人々が増えたため、他国のハーフティンバー建築と混同することなく、スイスシャレーをより精巧に模倣しようとするホテルも増えてきた。たとえば1987年、宮城県鳴子町（現・大崎市）の鬼首にあるオニコウベスキー場に建設された三菱地所によるリゾートパーク・ホテルオニコウベは（相京, 1988, 28）、背後に聳える禿岳とその周辺の景観をスイスに見立てて、玄関部の本棟と別棟のスキー客用のレストラン棟（現・スキー学校）が、RC造だがシャレー風にデザインされた（図18）。スイスの山小屋らしさを演出するため、かつてはスイスの救助犬セントバーナードも飼っていたという³⁷⁾。レストランやロビーの壁



図 17：ホテルグリーンプラザ白馬、長野県北安曇郡小谷村 (2020年8月、筆者撮影)



図 18：リゾートパーク・ホテルオニコウベ、宮城県大崎市鳴子温泉鬼首 (2020年11月、筆者撮影)

にはスイスの工芸品土産の陶器の皿やカウベルが随所に飾られ³⁸⁾、3階層吹き抜け階段部分には、スイスとベルン州の国旗が吊り下げられている。バブルの賜物として、ホテル周辺には別荘・ペンション村ができ、そのエリア内の多くの建物がスイスシャレーを意識したデザインになっているが、現在そのほとんどが廃業してしまっている (図 19)。

1994年には、奥志賀高原にスイス・シャレーと見紛うようなホテルグランフェニックス奥志賀 (設計・施工：北野建設) が開業する (図 20)。シャレー建築も多いスイス・グラウビュンデン州のクロスターズ Klosters に1960年代に住んでいた、スポーツウェアメーカー、フェニックス社の社長、田島和彦氏が発案したホテルで³⁹⁾、その建設のために現地の職人も派遣したという (早川, 1995, 39)。志賀高原エリアで最も良いホテルとして誕生し、毎年スキーシーズンに皇室が利用することでも知られ、日本のスイスシャレー風建築はここでピークを迎えたかのようなかった (河村, 2021a, 61-62)。



図 19：宮城県大崎市鳴子温泉鬼首にあるスイスシャレー風のペンション群、手前の建物にはスイスの地名に因んだ屋号でペンション・サンモリッツと書かれている（2020年11月、筆者撮影）



図 20：ホテルグランフェニックス奥志賀、長野県下高井郡山ノ内町（2020年7月、筆者撮影）

4. 結論

以上戦前から戦後～バブル期まで、日本で山小屋風・スイスシャレー風のホテルが浸透してゆく経緯を辿った。まず1930年代に富裕層の邸宅や山岳・高原リゾート地のホテルでスイス風が増加するが、日本の山間の伝統民家の半木骨造が、スイスやチロルのハーフティンバー建築やシャレーとも調和することから、日本独自に湾曲されて解釈されたスイス風の建物のイメージが形成されはじめた。戦後は、高度経済成長期のレジャーブームや、1970年代の札幌オリンピック開催とTVアニメ「ハイジ」の放映の影響も相まって、山岳・スキーリゾート地にスイスシャレー・山小屋風のホテルやペンションがさらに増えていく。しかし都内にあった徳川家の英チューダー様式の邸宅が1968

年に八ヶ岳に移築され、ドラマ『高原へいらっしやい』のロケ地にもなったことをきっかけに、ハーフティンバー意匠が「高原的イメージ」のアイコンとして定着するようになり、ハーフティンバー調のホテルやペンションはますます増加していった。バブル期は日本人が海外旅行・滞在を頻繁に行うようになり、現地のスイスシャレーを見る機会が格段に増えたため、よりリアルなスイスシャレー風の宿泊施設が建設されるようになったものの、依然として、ハーフティンバー意匠建築もまた、山岳・高原リゾート地でバブル期にはさらなる開花を遂げていたのだった。

【謝辞】

本研究は、2020年度跡見学園女子大学特別研究助成費を受けて実施された研究発表の一部である。ここに記して心より謝意を表します。

〈注〉

- (1) シャレー chalet という仏語が英国で普及するのは19世紀半ば以降で、それまでは Swiss cottage と呼んでおり、ジョン・ラスキン John Ruskin がスイスシャレーについても論じている著書『建築の詩学 The Poetry of Architecture』(1838年)の中でも、chalet よりも cottage の使用を優先していた。つまり非フランス語圏では、それぞれの国の言葉、英語圏なら「スイス・コテージ」、イタリア語圏なら「カパンナ・スヴィッツェラ capanna svizzera」、ドイツ語圏なら「シュヴァイツァーハウス Schweizerhaus」「シュヴァイツァーヒュッテ Schweizerhütte」「シュヴァイツァライ Schweizerei」などと、19世紀のあいだ呼んでいることが多く、20世紀になって外来語の「シャレー」で広く定着するようになる (Kawamura, 2018, 323)。
- (2) 西村伊作は、ミラノからシンプロン峠を越えてスイスに入り、汽車の車窓からアルプスを眺め、レマン湖畔のテリテに宿泊した。そこからパリ行きの列車に乗るために船でジュネーヴまで行きスイスを後にしたと、彼の自伝に書いてあり (西村, 1960, 184)、スイス滞在日数は短いため、本格的なシャレーを見る機会があったとしても極めて限定的なものと思われる。
- (3) 「桑原の山の村」とは、紀伊の山間にある北山村を指す (加藤, 1990, 100-101; 田中, 2001, 140-142)。外観の写真2枚と手書きの平面図2枚 (1・2階) は、西村の著作『樂しき住家』の74ページと75ページの間に挿入されている。
- (4) ただし構造でなく装飾のみのハーフティンバーについて西村伊作は、著書『樂しき住家』のなかで次のように批判している。「現今日本の西洋館にも此のハーフチンバースタイルが多く出来ていますが、その多くは柱の形を、後で板で作って取り付けた、化粧柱が多いようです。(中略)化粧柱だと巾の広い板を打ち付けて太過ぎる柱形を作るなどして家の感じを悪くします」(西村, 1919, 124)。
- (5) 加賀正太郎のユングフラウ登攀の記録は「欧州アルプス越え」と題する旅行記 (1911年) に収められていて、ベルグリの山小屋の宿帳には1901年のウォルター・ウェストン Walter Weston (日本アルプスを広めた英国の登山家) のサインを発見したという。
- (6) 日本海に面していることから、1階の内装は、海辺のイメージにあったスペイン風を採用した。設計はヴォーリズの可能性も指摘されているが、施工は大林組によるもので、1989年に改修され、2009年に国の登録有形文化財になっている。文化庁「文化遺産オンライン：旧右近家住宅西洋館」<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/192210> (2021年3月13日閲覧)。
- (7) なお揚輝荘の別館「伴華楼 (ばんがろう)」の建築家でもある鈴木禎二 (1870-1941) は、名古屋の丘陵地帯の南山にトヨタ自動車の創業者である豊田喜一郎 (1894-1952) のために、1933年、木骨造の山小屋風の邸宅 (現・トヨタ鞍ヶ池記念館) も設計している (揚輝荘の会, 2008, 104-105)。
- (8) 北海道大学が所有する5つの山小屋のうち最も古かったが、老朽化により1992年に倒壊したため、1994年に再建された。北海道大学「山小屋」<https://www.hokudai.ac.jp/gakusei/campus-life/college/hut/> (2021年3月17日閲覧)。
- (9) 北海道大学スキー部15周年を記念して建てられ (角・越野, 1977, 19)、1928年の冬には秩父宮雍仁親王も宿泊した (向井, 1933, 169)。同年、空沼岳にもヒンダーによる設計で秩父宮殿下の名を冠したヒュッテ (現・空沼小屋) が建てられたが (角, 2012, 19; 24)、ここは高床式の丸太小屋で、屋根勾配がシャレーのように緩やかではない。
- (10) なお山崎春雄は、1951年にヘルヴェティア・ヒュッテによく似た「白井小屋」も建てたが、2011年に焼失してしまった (中村, 2012, 158)。
- (11) 「瑞西山岳会の登山小屋」という題で『山と雪 (2)』(1930年11月号) から『山と雪 (8)』(1931年9月号) まで連載していた。
- (12) 1920年刊行の『全国の温泉案内』の巻末付録の「全国主要温泉・海水浴旅館」のリストの2ページ目に掲載されている。
- (13) 日本各地での外国人向けの高級志向のホテル建設ラッシュは、1936年に1940年に東京オリンピックが開催される予定が決まってからさらに加速した。
- (14) 設計は高橋貞太郎 (1892-1970) で、現・上高地帝国ホテルの建物は1977年に再建されたものである。
- (15) 設計は竹中工務店の早良俊夫 (生没年不明)。
- (16) のち志賀高原ホテルと改名。設計者は不明でドイツ人という説がある。1963年6月、地上3階の赤い屋根の新館を外観竹中工務店の施工で増築した (多賀谷, 1965, 65)。
- (17) 設計者の高橋貞太郎は、このホテルの建物をスイス風にするため、スイスへの視察旅行まで行っている。塔屋の上に伝統的なスイスシャレーのような小屋が載っているが、箱型の母屋の建物自体は視察当時のスイスの現代建築からの影響されているのではないだろうか。
- (18) 1963年に焼失し、1965年にRC造で再建されたが (斎藤, 1966, 11)、塔屋部分のシャレー風の小屋の屋根の形状も切妻から半切妻へと大幅に変更されている。

- (19) 白雲楼ホテルは1998年に廃業し、本館と貴賓館が国の登録有形文化財であるにもかかわらず放置・老朽化のため、2006年に解体された。
- (20) 白井晟一のデビュー作は、ハーフティンバーの欧風個人住宅「河村邸」(1938年、現存せず)だった。
- (21) 秋ノ宮村の村役場は、のち稲住温泉に移築され、現在は卓球場として使用されている。その一方、佐藤武夫(1899-1972)設計の矢板市庁舎は、矢板市が田園都市としての性格を持ち合わせていることから、北関東の「山村」の民家をモチーフにしている(佐藤, 1963, 119)、切妻屋根に白壁に黒い柱梁の骨組に欧風要素は全くなく、生粋の日本の伝統建築を思わせる。
- (22) 同じく白井晟一の設計によって、1956年に妙義山を背にする丘の上に完成した群馬県の松井田町役場(施工・鹿島組)は、2階で連続する白亜の柱から、しばしばパルテノン神殿に例えられるが、屋根勾配・連続するバルコニー・地上階両脇の石積みといった組み合わせはシャレー建築風にも見える。
- (23) その紹介事例は、福岡・彦山にあるRC造の八幡製鉄健康保険組合の保養施設(レーモンド建築設計事務所)、愛媛・今治の海辺にある倉敷レイヨンの保養施設(倉敷レイヨン営繕部)、栃木・那須にある塗装会社の社長の別荘である。
- (24) そのなかではフランク・ロイド・ライトの弟子の遠藤新の息子、遠藤栄(1927-2003)が設計した栃木・西那須野の山荘が、ライトと父の作風を継承していて、石積みの土台と切妻屋根の傾斜に洋風の要素を感じさせる。
- (25) 曾原国蔵の設計した山荘(富士山麓)は、『新建築』1960年9月号にも掲載されている。
- (26) この四ツ谷のレストラン「スイスシャレー」は、1978年に新宿の野村ビルの50階に移転し、この新店舗においてもシャレー風の内装を施してスイス料理を供していた(1990年代に新宿の「スイスシャレー」に通っていた小関孝子氏からご教示頂いた証言談であり、ここに心より御礼申し上げる)。
- (27) 稲住温泉の旅館は、2014年に一旦閉業し、2019年に共立リゾートの傘下となり改修されたさい、「浮雲」は客室棟となったが、現在は従業員寮として使用され、白井晟一によって「浮雲」のためにデザインされた欧風の照明器具は今ここには使用されていない。
- (28) 同じく「高原ホテル」という立地で村田政真が設計した「那須ホテル」(『新建築』1961年9月号で紹介)は、山小屋要素が全くない箱型のモダニズム建築である。
- (29) 1994年に解体され、1996年の再建では、坂倉準三による切妻屋根のデザインを踏襲したと、当時のホテル雑誌には書かれているが(高瀬, 1997, 49)、じっさいにはハーフティンバー意匠を使った蓼科東急ホテルと似た雰囲気の中小屋風となった。
- (30) 同ホテルがその当時経営するレストハウス「りんどう」は、長野の古民家風のハーフティンバーの外観である(林, 1973, 37)。
- (31) 日高岩井がプロデュースしたスキーリゾート・ホテルで、(株)ライジングサン当時の社長は長谷川貞典(林, 1973, 38)。
- (32) 他にもスイスシャレーそっくりの建物で「ハイジ」と命名したペンション:白馬村のペンション・ハイジ・ホーフ(1978年)と苗場のペンション・ハイジ(1979年)が、1970年代後半に開業している。
- (33) 今は閉鎖されてしまったオフィシャルサイト(<https://www.hotelheidi.co.jp/>)内の告知文によれば、2019年5月から閉鎖して、2020年7月にリニューアルオープンの予定であったが、さらに延長され、別名のホテル「HÔTEL de L'ALPAGE」として再開すべく現在準備中である。
- (34) 現在は宿泊できず、1983年より「ホテル八ヶ岳高原ロッジ」のレストラン・結婚式場用に使用され、2020年より、「八ヶ岳高原ヒュッテ(旧・尾張徳川家本邸主屋)」として国の登録有形文化財になった。
- (35) ホテル「ハットウォールデン」のオフィシャルサイト(<https://www.hut-walden.com/company.html>)によれば1977年の創業。
- (36) 東急不動産が茅野市から借り受け、総合開発を行っている「東急リゾートタウン蓼科」内のリゾートホテルで、洋室58室、コテージ20棟(木造平屋)からなる(平山, 1981, 16; 36)。
- (37) 現在セントバーナード犬を飼育中の山小屋風デザインのホテルに、青森県の十和田八幡平国立公園内に位置する「八甲田ホテル」(設計:早川正夫建築設計事務所)がある。1991年の開業で、ロビーのある棟は建設当時、戦後最大の木造建築となった丸太小屋キャビン風(越田, 1992, 149)で、カナダのレッドシダーや樹齡150年のオレゴンパインの極太の丸太が組まれた。柱や梁の仕口に、釘を使わずに木材だけで組む四方差しを応用した、早川正夫(1925-2013)による「早川式かんざし工法」によるもので、施工を行った建設会社「(株)佐藤秀」の創業者である秋田出身の建築家、佐藤秀三(1897-1978)は、山形県工業学校で建築を学び、初期の作品にも欧風のハーフティンバーの個人住宅が数件:亙理邸(現・林邸、杉並区、1933年)、渋谷邸(品川区、1938年)があり、ハーフティンバーのホテル建築作品でも日本の伝統的な古民家からインスピレーションを受け欧風要素も加味した、十和田プリンスホテル(1977年)や「日光プリンスホテル(1979年)がある。株式会社佐藤秀「宿泊施設」と「佐藤秀三 設計作品一覧」<http://www.satohide.co.jp/works/08/index.html>と<http://www.satohide.co.jp/hidezo/archives/list.html>(いずれも2021年3月27日閲覧)。
- (38) かつてホテルの売店ではスイスの雑貨や民族衣装が販売されていた(高橋, 1988, 133)。
- (39) 株式会社ズイカインターナショナル「ホテルグランフェニックス奥志賀ができるまで《田島和彦自伝》」<https://www.hotelgrandphenix.co.jp/autobiography/>(2021年3月27日閲覧)。

〈参考文献〉

(和文)

- 相京俊二(1988)「本格的リゾートホテルが誕生したオニコウベスキー場リゾートパーク・ホテルオニコウベ」『観光』3月号(258), pp. 28-33
- 浦達雄(1989)「観光地の発展構造にみる観光地の成熟化—清里高原の例」『観光』1月号(268), pp. 27-32

- 遠藤楽建築創作所 (1961)「山荘3」『新建築』8月号(36), pp. 59-62
- 大石勇 (1994)『伝統工芸の創生：北海道八雲町の「熊彫」と徳川義親』吉川弘文館
- 大谷茂之 (2019)「民具短信 北海道の木彫り熊：八雲町を中心に」『民具マンスリー』2019年1月号, pp. 12851-12854
- 加賀正太郎 (1961)「欧州アルプス越え」『世界紀行文学全集 第20巻 (山岳編 第1)』修道社, pp. 5-14
- 加藤百合 (1990)『大正の夢の設計家—西村伊作と文化学院』朝日新聞社
- 角幸博 (2012)『建築家マックス・ヒンデルとヘルヴェチアヒュッテ (ヘルヴェチアヒュッテ八十五周年記念講演会)』北大山岳館
- 角幸博・越野武 (1977)「建築家マックス・ヒンデル MAX HINDER の経歴について」『北海道大工学部研究報告 83』, pp. 15-24
- 金沢市史編さん委員会編 (1998)『金沢市史 資料編 17：建築・建設』金沢市
- 河村英和 (2013)『観光大国スイスの誕生—「辺境」から「崇高なる美」の国へ』平凡社
- 河村英和 (2021a)「長野県内に派生したスイス風建築とスイス的な風景 (1)」『コミュニケーション文化 第15号』, pp. 45-64
- 河村英和 (2021b)「日本各地で派生した『スイス村』計画の変遷と現状」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要 第32号』, pp. 63-99
- 岸田日出刀 (1934)「第七回建築展覧會 第二部懸賞『国立公園に建つホテル』設計応募案審査評」『国立公園』2月号(6), pp. 14-15
- 京都伝統建築技術協会編 (2014)『揚輝荘聴松閣修復整備工事報告書：名古屋市指定有形文化財』名古屋市
- 桐山秀樹・吉村祐美 (2012)『軽井沢という聖地』NTT出版
- 建築学会編 (1934)『国立公園ニ建つ山小屋 建築設計図案集』国立公園協会
- 倉敷レイオン管轄部 (1960)「瀬戸内海に建つ海の家」『新建築』5月号(35), pp. 13-20
- 越田悟全 (1992)「八甲田ホテル」『月刊ホテル旅館』3月号(29-339), pp. 149-154
- 小牧實繁 (1936)「飛騨の民家風景」『風景』1月号(3), pp. 26-27
- 斎藤武 (1966)「再建された赤い屋根のホテル—阿蘇・湯の谷温泉 阿蘇観光ホテル」『月刊ホテル旅館』8月号(3), pp. 11-15
- 佐藤武夫建築設計事務所 (1963)「矢板市庁舎」『新建築』4月号(38), pp. 119-124
- 実業往来社編 (1972)「味の散歩道 (47) スイスシャレー」『実業往来』1月号(241), p. 123
- 白井晟一 (1955)「3つの役場—秋の宮村役場」『新建築』10月号(30), p. 18
- 白井晟一 (1955)「3つの役場—松井田町役場」『新建築』10月号(30), pp. 19-21
- 白井晟一研究所 (1952)「秋ノ宮村役場」『新建築』12月号(27), pp. 591-593
- 白井晟一建築研究所 (1953)「秋田県I温泉ホテル増築—玄関・会議館『浮雲』」『新建築』8月号(28), pp. 20-25
- 須藤真金 (1950)『あめりか住宅史話：あめりか住宅の生い立ち』新住宅社
- 砂本文彦 (2008)『近代日本の国際リゾート—1930年代の国際観光ホテルを中心に』青弓社
- 全国名所案内社編 (1920)『全国の温泉案内』岡村書店
- 曾原国蔵 (1961)「山荘4」『新建築』8月号(36), pp. 63-70
- 曾原国蔵 (1961)「山の建築」『新建築』8月号(36), pp. 68-69
- 大学総合研究シリーズ企画編集委員会編 (1980)『北海道大学総合研究』日本リクルートセンター出版部
- 高瀬信夫 (1997)「新作ホテルの誌上プレビュー①：白馬東急ホテル」『月刊ホテル旅館』3月号(34-399), pp. 49-52
- 高橋栄一 (1988)「スキーリゾートの新作展開 2点—ホテルオニコウバ」『月刊ホテル旅館』3月号(25-291), pp. 126-128; pp. 133-136
- 多賀谷義雄 (1965)「白樺に囲まれた山のホテル—信州・志賀高原ホテル」『月刊ホテル旅館』1月号(2), pp. 61-65
- 田中修司 (2001)『西村伊作の楽しき住家—大正デモクラシーの住い』はる書房
- 田辺博司 (1960)「英彦山 山の家 レーモンド建築設計事務所」『新建築』5月号(35), pp. 2-12
- ちばかおり (2017)『ハイジが生まれた日—テレビアニメの金字塔を築いた人々』岩波書店
- 東工大・清家研究室 (1960)「山の家」『新建築』12月号(35), pp. 13-17
- 東武興業株式会社 (1958)「光徳ロッジ」『新建築』2月号(33), pp. 34-39
- 東武興業株式会社 (1958)「赤城ロッジ」『新建築』2月号(33), pp. 40-44
- 中村晴彦編 (2012)『ヘルヴェチアヒュッテ八十五周年記念誌—建設した人々の記録—』北大山岳館
- 西村伊作 (1922)『生活を芸術として』民文社
- 西村伊作 (1919)『楽しき住家』警醒社書店
- 西村伊作 (1923)『明星の家』文化生活研究会
- 西村伊作 (1960)『我に益あり：西村伊作自伝』紀元社
- 早川哲 (1975)「くつろぎとゆとりをモットーとした牧歌調雰囲気：ホテルハイジ」『月刊ホテル旅館』11月号(12-143), pp. 38-41
- 早川哲 (1995)「ホテルグランフェニックス奥志賀」『月刊ホテル旅館』3月号(32-375), pp. 37-40
- 林浩二 (1973)「黒姫ライジングサンホテル」『月刊ホテル旅館』3月号(10-111), pp. 38-41
- 林浩二 (1973)「フジタ斑尾高原ホテル」『月刊ホテル旅館』3月号(10-111), pp. 34-37
- 平山恵一 (1981)「蓼科東急リゾート」『月刊ホテル旅館』11月号(18-214), 16-17; pp. 36-40
- 福嶋忠嗣 (芦屋洋館建築研究会編) (2015)『芦屋の和洋館よとわに—阪神間モダニズムの興亡と継承』溌標
- 藤木九三 (1961)「アルプスの山小屋」『世界紀行文学全集 第20巻 (山岳編 第1)』修道社, pp. 236-238
- 藤木忠善 (1960)「白馬東急ホテル 坂倉準三建築研究所」『建築文化』3月号(15), pp. 25-31
- 松方三郎 (1956)「スイスの山小屋」『民藝』8月号(44), pp. 16-19
- 三橋謙一 (1960)「新設の白馬東急ホテル拝見」『ホテルレビュー』4月号(11-120), pp. 8-11

- 向井四郎 (1933) 「テイネパラダイスヒュッテのことども」北海道帝国大学文武会スキー部編『北大スキー部々報. 第2』, pp. 167-174
村田政真建築設計事務所 (1959) 「霧島高原ホテル・ヒュッテ」『新建築』8月号(34), pp. 25-34
村田政真 (1960) 「これからのホテルと旅館—霧島高原ホテルについて」『国立公園』2月号(123/124), pp. 8-11
村野・森建築事務所 (1951) 「志摩観光ホテル」『新建築』7月号(26), pp. 181-195
中村清太郎 (1959) 「この人を知らう—加賀正太郎氏」『山岳』5月号(4), pp. 4-6
樋口清 (1958) 「山小屋のこと」『新建築』2月号(33), pp. 45-47
保岡勝也 (1934) 「スキスの山荘」『庭園と風景』7月号(16), pp. 16-18
揚輝荘の会編 (2008) 『揚輝荘と祐民—よみがえる松坂屋創業者の理想郷』風媒社
RIA 建築総合研究所 (1960) 「那須山荘」『新建築』5月号(35), pp. 47-55

(欧文)

- Esteban, E. (2008). *Les Maisons Basques*, Paris, Éditions CPE
Gandin, A. (2009). *Destination Normandie. Deux siècles de tourisme XIXème-XXème siècles*, Milano, 5 Continents
Gladbach, E. (1882). *Der Schweizer Holzstyl in seinen cantonalen und constructiven Verschiedenheiten vergleichend dargestellt mit Holzbauten Deutschlands*, Zürich, Verlag von Caesar Schmidt
Hunt, T. H. (1841). *Exemplars of Tudor architecture, adapted to modern habitations: with illustrative details, selected from ancient edifices, and observations on the furniture of the Tudor period*, London, Henry G. Bohn
Kawamura, E. (2018). *Tipi e vicende degli chalet e villaggi svizzeri 'fuori dalla Svizzera' fra Ottocento e Novecento*, in *La Città Altra*, a cura di F. Capano, M.I. Pascariello e M. Visone, Napoli, Federico II University Press, pp. 323-330
Robinson, P. F. (1828). *Rural Architecture; being a Series of Designs for ornamental Cottages*, 3rd ed., London, James Carpenter and Son
Sauter, C.; Seger, C. (2014). *St. Moritz: Stadt im Dorf*, Baden, Hier und Jetzt